

「教える人になること」が教えてくれること

—研究者志望から高校教員になった人に聞く「学びと教職観」についての体験的知見—

To be teacher taught us something of learning

伊藤正信

Masanobu Ito

立命館大学大学院応用人間科学研究科

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Human Services

Key words : 教師文化、教師の学び、教師の指導意識

目的

私は高校教員であり、学校の中での教師の「指導意識」から生じる過剰な操作性の問題や、学校体制として形成された特定の「指導意識」や「指導体制」の問題に関心がある。前者は、教科指導、生活指導、部活動指導などの過剰化と過熱化を生じさせ、その中で生じる人権侵害行為などの引き金にもなる。後者は、多くの学校でみられる「生活指導体制」や「進学指導体制」が、一定必要なものではあるが、その体制の中で生徒と教員が特定の方向に追い込まれていくという構造的問題をかかえている。

そうした現状の中で、個々の教員は何ができるという観点から、有意義な知見を見出したい。

本研究では、研究者志望から高校教員になった人に注目して、その人の体験の中から、これらの問題を見直す契機となるものを探っていく。研究者志望だった人に注目する理由は、その人自身の学びや探究への思いの深さと「教える側になること」の過程を体験的に持つことから生まれる可能性に着目している。

方法

研究者の志向をもって大学院修士課程や博士課程に進みその後何らかの理由で高校教員になった方にインタビュー（60分を1回または2回）を行い、録音-逐語録をデータとする。対象者は7名程度とする。M-GTAを用いて概念と理論の生成を行う。

あわせて、自己インタビューを行い、録音-逐語録としてデータ化したものから私の教職体験の振り返りを行い分析を行う。

結果と考察

現段階は4名の方のインタビューを実施し逐語録から分析ワークシートを作成している。それぞれの方のお話の中

でユニークで貴重な体験を聞くことができた。ユニークさや個性と同時に、「本質探究の欲求」や「指導意識からの距離感」など重なってくる部分も見られる。今後さらに2~3人の方にインタビューを実施する予定であり、M-GTAで結果をまとめていきたい。また自己インタビューの結果はこの中で総合考察という形で取り入れたい。

自己インタビューは3回実施した。逐語録からいくつか自分が自覚していないことが明らかになった。

- ・生活指導部に在籍していた2年間は自分自身が批判的だったり意味がないと感じている生活指導方針にのっとり、場合によって威圧的あるいは権威的な手法も身につけるようになった。それは役割として要請されているというよりも「自然にそうなった」。

- ・他の教員を批判しながら自分も教育的観点でなく「操作意識」に陥ることがある。それは場の状況であったり、自分の思い込み（恐れ）から生じる。その際にも、自らは「指導している」という意識を持つ。

- ・クラスづくりや部活動指導に力を入れることを自分では教育的な目標のもとで説明していた。たんに自分が好きだから（やりたいから）という部分を意識から消していた。

- ・特定の「指導体制」の中でも、「自分の領域」の中では強い意欲を持って取り組むことができる。それは、その領域の中では自らの主体性が発揮できるからである。

- ・詰込み型の進学校と探究型の進学校は指導の方向性とその元になる人間観が180度違っていると思っていたが、どちらも政策的に作られた進学校として要請されているものは同じであるという根本的な部分を何故か忘れていた。

参考文献

『学びの専門家としての教師』 佐藤学他 岩波書店 2016

『日本の教師文化』 稲垣忠彦、久富善之編 東京大学出版会 1994